八尾歴史物語

五十七巻

良好な状態で残る横穴式石室～高安千塚古墳群～

八尾市の東部に位置する高安千塚古墳群（以下「高安千塚」）は、２００基以上もの古墳が集中して分布する古墳群で、中でも服部川支群は最も古墳が集中しています。

埋葬施設は横穴式石室で、石を積み上げて、玄室（棺を納める場所）と羨道（通路）で構成されています。玄室と羨道をつなぐ部分を袖と呼び、袖の有無によって、両袖式・片袖式・無袖式に分類されます。石室の築造技術は、４世紀後半（約１６００年前）ごろに朝鮮半島から伝わり、追葬や合葬ができるようになりました。被葬者を納めた棺には、木棺や石棺、陶棺（焼物）があり、服部川37号墳では、木棺と、二上山産凝灰岩を板石状に加工して組み合わせた石棺が見つかっています。

高安千塚の特徴の一つに玄室の大きさが挙げられ、５～７畳ほどが34基、９畳ほどが６基あります。郡川の法蔵寺境内にある開山塚古墳（郡川１号墳）は、約10畳で、高さは４ｍもあり、広々とした空間が広がっています。現代では石室は「埋葬施設」と認識されていますが、江戸時代ごろは「住居跡（穴居趾）」と考えられていたようです。

現在、高安山の自然や植木畑の中で、開口する横穴式石室が良好な状態で残されています。ランタンで中を灯すと、石材が精密に積み上げられた様子がよく分かり、石室を造った人々の技術の高さがうかがえます。石室や古墳を造るためには、たくさんの労働力が必要でした。それらをまとめあげる権力を持った人物が高安千塚に葬られていたのでしょう。

※高安千塚での写真撮影会を開催します（詳細は21ページ参照）。

問 観光・文化財課
TEL ９２４・８５５５
FAX ９２４・３９９５